

昔むかし、七里に長浜マツタルマンジョウという人がいました。国一番の長者でしたが、子どもがいませんでした。

ある年の三月三日、マツタルマンジョウは、妻に向かつていいました。

「わしは、もう四十八歳にもなるのに、わたしたちには子どもがひとりもない。財産を継がせる者がいない。あらん限りのお寺に参つて、神さまの子をもらおうじゃないか」

ふたりは家を出て、すべてのお寺を回つてお願いしましたが、どこへ行つても、

「おまえたちに子はできない」といわれるばかりでした。

マツタルマンジョウは家に帰つて来ましたが、ふと、オーシンの寺に行きわすれていたことに気づきました。さっそく出かけて行くと、オーシンのお坊さまが、

「どうしてこんな夜遅くに来られました」とききました。そこで、

「わたしは、七里の長浜マツタルマンジョウですが、銭金はたくさんあつても、子どもがいません。お寺をぜんぶ回つても、おまえたちには子はできないといわれたので、ここにやつて来ました。どうか、子どもをひとりさずけてください」といいました。お坊さまは、

「では、あなたの子ではありませんが、神さまの子をひとりさしあげましょう。この花を持つて帰つて、鉢に植えて枕元に置いて寝るのです。あしたの朝、赤い花が咲いていれば男の子が生まれるし、白い花が咲いていれば女の子が生まれます」といつて、花の苗を一本くれました。

マツタルマンジョウは、その苗を大事に持つて帰り、鉢に植えました。それを枕元に置いて寝ると、あくる朝、まっかな花が咲いていました。

「さあ、妻や、妻や。赤い花が咲いているぞ。男の子が生まれるぞ。茶をわかせ、祝いだ、祝いだ」とよろこびました。

まもなく、男の子が生まれました。マツタルマンジョウは、オーシンの寺に行つて、お坊さまに、

「ありがとうございます。男の子が生まれたので、名前を付けてください」とたのみました。お坊さまは、

「あなたが初めて来た日は寅の日、今日も寅の日だから、寅千代丸と名づけるとよい」といいました。

寅千代丸は、日に日に大きくなって、ひと月経つと一年育てたくらい、一年たつと、十二年育てたくらいに大きくなりました。

七歳になったとき、寅千代丸は、父親に、

「オーシンのお寺に行つて、手習いをしようと思います。どうか行かせてください」とたのみました。両親は承知して、寅千代丸をオーシンの寺にやりました。

寅千代丸は、学問がよくできて、じきに、八十五人の弟子たちの中で一番になりました。すると、ほかの弟子たちが寅千代丸をねたむようになりました。

ある日のこと、弟子たちが集まつて、なんとかして寅千代丸をなき者にしようと思ひました。そして、一番年上の弟子が、お坊さまの所に行つていいました。

「お坊さま、寅千代丸は、お坊さまを殺して、自分がお坊さまの位につくといっています」お坊さまは驚き、

「あいつは、わたしが生ませて名づけてやったのだ。ここに連れて来い」といいました。寅千代丸は、四、五人の弟子たちに引き立てられて、お坊さまの所にやって来ました。お坊さまが、

「おまえは、わたしを殺してわたしの位につくといったのか」ときくと、寅千代丸は、

「わたしは、お坊さまに命をいただいた者です。どうしてそんなことをいいますか」といいました。けれども、お坊さまは、

「みなが、そういうのだからしかたがない。おまえを三年間、死んだ者が行くハツテングラ山モーシングスクへ落とすことにしよう。もしおまえがうそをついていなければ、ぶじにこの世に帰って来られるだろう。うそをついていれば、二度ともどつて来られない」といいわりました。

寅千代丸は、家に帰って、

「お父さん。わたしは、学問が一番になったばかりに、友だちにねたまれて、三年間、ハツテングラ山モーシングスクへ落されることになりました。お別れの杯をしてください」といいました。父親は、

「分かった。では、わしの三頭の馬のうちで、一番良い馬を選んで乗って行くがよい。それから、七人力の刀があるから、それを持って行け」といって、送り出してくれました。

寅千代丸は、馬に乗り、刀を持って旅立ちました。

しばらく行くと、大きな猫が、ゆく手をさえぎり、馬におそいかかって来ました。寅千代丸は、

「わたしは、七里の長浜マツタルマンジョウの子、寅千代丸だ」と名乗りを上げて、七人力の刀で、猫に切り付けました。猫は、たおれて、

「わたしは、天狗の神をおがんでいる者だが、おまえにはかなわない。早く通って行け」といって、息絶えました。

どんどん進んで行くと、おそろしく大きな犬が、ゆく手をさえぎり、馬におそいかかって来ました。寅千代丸は、こんどはやられるかもしれないと思いました。けれども、

「わたしは、七里の長浜マツタルマンジョウの子、寅千代丸だ」と名乗りを上げて、七人力の刀で、切り付けました。ひと打ちすると、犬はよろめき、二打ちすると、たおれました。

そして、

「わたしは、天狗の神をおがんでいる者だが、おまえにはかなわない。早く通って行け」といって、息絶えました。

それからまたどんどん進んで行くと、大きな牛が、ゆく手をさえぎり、馬におそいかかって来ました。馬は、立ち上がればたおされ、立ち上がればたおされて、寅千代丸は、

「もう生きては帰れない。こんなあわれな思いをするくらいなら、この世に生まれなければよかった」とさえ思いました。それでも、

「わたしは、七里の長浜マツタルマンジョウの子、寅千代丸だ」と名乗りを上げて、「この七人力の刀を見よ」といって、力の限り切りつけました。ひと打ちしても、牛はびくともしません。けれども、二打ちすると、よろめき、三度うつとたおれました。牛は、

「わたしは、天狗の神をおがんでいる者だが、おまえにはかなわない。早く通って行け」といって、息絶えました。

寅千代丸は、またどんどん進んで行きました。すると、ガラスでできたりっぱな家が並ん

でいました。一軒の家は、罪人を集めてあり、もう一軒の家では、人びとがお酒を飲んで楽しく遊んでいました。またもう一軒の家では、人びとが集まって歌を作って遊んでいました。そこを通りすぎた所で、寅千代丸は、ハツテンクラ山モーシングスクの王さまに会いました。

寅千代丸は、

「はじめてお目にかかります」とあいさつしました。王さまは、何をしに来たのかとたずねました。

「わたしは、七里の長浜マツタルマンジョウの子、寅千代丸というものです。わたしは、オーシンのお坊さまの所で学んでいましたが、学問が一番になつたばかりに、友だちにねたまれて、ここへ落とされました。どうぞ、罪人としてあつかつてください」と、寅千代丸が答えると、王さまはいいました。

「どうしてそのようなことをいうのか。早くもどれ。もどつて懸命に働き、八十八歳になつたらまたここへ来い」

そこで、寅千代丸は、もどつて行きました。

帰ってみると、家を出てから三年たつていて、家の中では、法事をしているところでした。

寅千代丸は、すぐに家に入らないで、馬から下りて、門の所にすわっていました。すると、そこへ、小さい子どもが、ほうきを持って出て来ました。寅千代丸は、その子に、

「この家では、だれの法事しているのか」とたずねました。子どもは、ふしぎそうな顔をしないで、

「この家には、寅千代丸という子どもがいたのですが、その子がなくなって三年の法事をしているところですよ」と答えました。そして、ほうきを持ったまま家の中にかけこんで、

「表に寅千代丸さまのような人が来ています」とさけびました。父親は、

「ばかをいうな。ハツテンクラ山モーシングスクから帰った者などいない」といいました。

「いえない、寅千代丸さまにちがいありません。家を出るときに着ていった着物を着て、七人力の刀を持っておられます」

「なんだと。それなら、かごで迎えて来い」

父親は、寅千代丸を座敷にあげて、

「もしおまえがほんとうにわたしの息子なら、七本の矢で目を射ても、みなはじき返すだろう。もし怪しい物の怪ならば、矢はおまえの目に立っだろう」といいました。そして、寅千代丸に向かつて、七本の矢を放ちました。矢はことごとくはじかれて、家の外へ飛んで行ってしまいました。父親は、

「おお、息子よ。おまえは正直だったのだ、あの世へ行っても、もどつて来られたのだ」とよろこびました。

あくる日、寅千代丸は、父親といっしょに、オーシンの寺に行きました。

「今、帰ってまいりました」というと、お坊さまは、

「おまえが正直だったのだ、もどつて来られたのだ。うそをついておまえを殺そうとした友だちは、ほら、この通りだ」といいました。見ると、悪い友だちたちは、七本の矢で射抜かれていました。